

『リンディスファーン福音書』 英国八世紀初頭の極彩色写本

国際コミュニケーション学部教授 田本 健一



愛知大学豊橋図書館には、『リンディスファーン福音書』のレプリカがあります。レプリカといっても、本学のもの、カヴァーの金銀宝飾細工、各ページの色具合、

しみの類まで、本物そっくりに制作された超豪華本です。本物は、ロンドンの大英図書館1階のかなり照明を落とした陳列室で、ガラスのケースに収納され、一般に公開されています。開いた状態で展示されておりますので、その開かれたページしか見ることができません。勿論、手にとって見ることもできませんし、カヴァーの状態も分かりません。それが、本学のレプリカではできるのです。

この写本の制作年代として、10年ほど前までは698年が通説となっていました。それが、今では、大英図書館彩色写本管理官ミシェル・ブラウン氏提案の720年頃という説が



有力になっております。ブラウン氏の説によると、『英国人の教会史』で有名な尊者ビード(the Venerable Bede, 673?-735) が写本制作に関与していたらしいとのこと。我が国の『古事記』や『日本書紀』の撰上の頃です。『リンディスファーン福音書』に代表される高度な写本文化の背景には、どのような歴史、社会があったのでしょうか？

まず、写本の名称となっているリンディスファーン(Lindisfarne)から見ていきましょう。



スコットランドとの境界線で、イングランド寄りの東側に小さな島があります。リンディスファーン島です。そこで制作された写本なので『リンディ

スファーン福音書』と呼ばれているわけです。ここは、島といっても一日に二度、干潮時には道路が現れ、英本土とつながります。このことは、尊者ビードが『英国人の教会史』の中で言及しておりますので、『リンディスファーン福音書』が制作された頃もそのような状態であったことはまちがいありません。この島には、リンディスファーン修道院があって、ノーサンブリア王国(アングロ・サクソン七王国の一つ)における北方キリスト教文化の中心地の一つとなっていました。修道院が創設されたのは635年頃のことでした。当時のオズワルド王は、異教的傾向がキリスト教に紛れるようになったことを憂い、キリスト教再興のために、スコットランド南西海岸沖、マル島(Mull)の南西沖にあるアイオーナ(Iona)島の修道院(アイルランド系)に宣教団を派遣してくれるよう依頼しました。一行を率いてやって来たのは、聖エイダン(St. Aidan)でした。その聖エイダンが宣教の本拠地として選んだのがリンディスファーン島であり、そこに修道院を建立したのです。その後、メルローズ(Melrose)の修道院で修業していたカスパート(Cuthbert)は、リンディスファーン島に派遣され、教区の改革に努め、685年にはリンディスファーンの司教に叙階されました。この聖人は、数々の奇跡を起こしたことで有名です。このように、北方キリスト教には、アイリシュ(ケル

ト)系の影響が濃厚に及んでいることが分かります。このことは、写本に見られるケルト模様、装飾の謎を解くカギとなるのです。

誰が、何の目的で、このような豪華な写本を作ったのでしょうか？そのヒントは、写本の奥付にあります。四人が関与しております。ラテン語の四福音書(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)を書き写して、飾り文字、クロスカーペット・ページの装飾、そして四福音史家のアイコンを描いたのはエアドフリス(Eadfrith)という修道士(リンディスファーンの司教)でした。製本の作業を行ったのは、エゼルワルド(Ethelwald)で、カヴァーに金銀宝飾の細工を施したのは、ビルフリス(Billfrith)という隠修士でした。最後の一人はアルドレド(Aldred)という司祭で、950～970年に当時の英語で行間注を付けたのです。その行間注はラテン語本文の一語一語に対して付けられたもので、後に、17世紀のアングロ・サクソン語彙集編纂のための重要な資料となりました。何のために作られたのか、ということになりますが、聖カスバート(687年没)と深い係わりがあるとされており、カスバートが聖人に列せられるのを記念して制作されたということです。因みに、聖カスバートの聖遺骨は今では、ダラム(Durham)の大聖堂のイースト・エンド近く、ハイオルターの下に埋葬されており、

写本の材質は、ヴェラム(vellum)というものです。上質の羊皮紙のことです。子牛の皮を薄くなめしたのですが、破れにくく、なめらかで、表、裏両方に書くことができます。リンディスファーン写本の場合は、129頭の子牛の皮が必要であったとのこと。当時は、動産としての家畜を意味する英語feoh[フェオホ]には“貨幣”の意味もありました。129頭の子牛というとどの位の価値があったのでしょうか？一説によると、高位貴族が戦いで囚われの身となった際の保釈金に相当するとのこと。

絵の具の原料には様々ありますが、特に青色の原料について触れておきましょう。聖マルコのアイコンで(folio 93v)、聖人が座っているクッションは青い色です。これはラピス・ラズリ(lapis lazuli)という準宝石を砕いたものを原料としております。アフガニスタン産が有名ですが、8

世紀初頭には英国で入手できていたこととなります。

最後に、装飾文字のことです。Folio 29は、マタイの福音書第一章第十八節の前半部分です。Christi autem generatio sic erat. Cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph... (イエスキリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが…)というテキストです。これは、いわゆるクリスマス・ストーリーの初めの部分です。あまりにも装飾を凝らしているのでは、読みにくいのではないかと思います。最初の文字は“Ch”ではなく、“X”です。これはギリシャ語の“カイ”です。従って、次の文字“P”は、ギリシャ文字“ロー”です。その次に来るはずの“IST”が省略されて、最後の語尾“I”(たぶん“イオタ”)が続いております。つまりXPIで“Christi”ということになる訳です。これらの3文字が組み合わせ文字(monogram)を構成し、ページの上半分を占めております。ノット・インターレース、ペルタ、スパイラル、図案化された動物画などが独特のケルト模様となって、文字や縁取りを装飾しております。さらに、ディミヌエンド(diminuendo)という手法のため、残りの文字は徐々に小さくなっているのが分かります。非常にダイナミックな構図になっております。



folio 93v



folio 29



(The pictures of the front cover, folios 29 and 93v are photocopied and reduced from Janet Backhouse, *The Lindisfarne Gospels* (Oxford: Phaidon 1981, repr. 1991))